

若きクロード・モネを導いた
「印象派の先駆者」
30年ぶりの回顧展

The 50th Year of the Sompo Museum of Art

Eugène Boudin

maître de l'instantanéité



開館50周年記念

ウジェーヌ・ブーダン展
—瞬間の美学、光の探求

2026

4/11 sat.—6/21 sun.

SOMPO美術館

Sompo Museum of Art

<https://www.sompo-museum.org/> 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

PRESS RELEASE

Eugène Boudin

maitre de l'instantanéité

「印象派の先駆者」と呼ばれる画家ウジェーヌ・ブーダン(1824-1898)の、日本では約30年ぶりとなる展覧会です。空や雲、海景、牛の群れなどを瑞々しい色彩と軽快な筆致で書き出したその作品は、故郷であるフランス北部のノルマンディーをはじめとする各地の光と大気の様子を見事にとらえています。戸外制作を重視し、移ろいゆく自然現象の「瞬間」に向き合うその態度は、若きクロード・モネ(1840-1926)を開眼させ、やがて印象派の誕生へとつながってゆくののです。

海の情景を描いた「海景画」と共に語られることの多いブーダンですが、その魅力はそれだけにとどまりません。油彩・素描・パステル・版画を中心に約100点で構成する本展では、人物や建築モチーフなどにも焦点を当てつつ、フランス近代風景画の発展に大きく寄与したブーダンの魅力を、新たな視点で問い直します。

展覧会のみどころ

- 1 “印象派の先駆者”ウジェーヌ・ブーダンの約30年ぶりの回顧展
クロード・モネの師として知られるブーダン。印象派の展覧会ではいつも目にする“印象派の先駆者”が、約30年ぶりに主役となる展覧会です。
- 2 フランスから油彩・素描・パステル・版画、約100点が来日!
初期から晩年にいたるブーダンの画業全体を、約100点を通じてご紹介するとともに、素描やオイルスケッチによって、自然が垣間見せる「瞬間」を追い続けたブーダンの制作プロセスにも迫ります。
- 3 8つの切り口でブーダンを再考
ブーダンと言えば、ノルマンディーの海辺を描いた「海景画」がよく知られていますが、それだけではありません。8つの切り口—「海景」「空」「風景」「建築」「動物」「人物」「素描」「版画」—を通じ、ブーダンの魅力を多角的に再考します。
- 4 印象派誕生から150年 ブーダンの功績と革新性を再発見
印象派誕生から150年、またブーダン生誕200年を迎えたことは、19世紀後半のフランス風景画の革新性を再検証するまたとない機会です。印象派に先駆けていち早く戸外制作による自然の臨場感をとらえようとしたブーダンの革新性を、今あらためて考えます。



画像出典:
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Boudin-eugene-c-face-half.jpg>

ウジェーヌ・ブーダン

Eugène Boudin, 1824-1898

ノルマンディー地方の港町オンフルールに船乗りの子として生まれ、11歳のとき一家は対岸のル・アーヴルに移住。同地で共同経営していた画材店の顧客であったバルビゾン派の画家たちと交流するなかで、画家を志す。パリでの3年間の修行時代には、ルーヴル美術館での模写を通じて17世紀オランダの風景画や動物画に学び、以降はノルマンディー各地を制作拠点として風景画や海景画を中心に描くようになる。1850年代半ばに出会った青年期のクロード・モネと共に戸外制作を行ったことは、のちの印象派誕生へとつながった。画業後半期は活動範囲をブルターニュ、ポルドー、ベルク、オランダなどに広げ、晩年にはヴェネツィアへも足を延ばした。表情豊かな空模様を画面に大きく取り込み、光の絶妙な変化をとらえたブーダンの作風は、カミーユ・コローやシャルル・ボードレールをして「空の王者」と言わしめた。サロン(官展)に出品された作品はたびたび国家に買い上げられ、1892年、68歳でレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受勲、1898年にドーヴィルで没する。

I 海景 Marines

ノルマンディーの港町に生まれ育ったブーダンにとって、海辺の風景は身近な存在であった。ロイスダールをはじめとする17世紀オランダの巨匠たちに学びながら海を主題にした絵を描き始めるも、画業初期は必ずしも「海景画」が主軸とはならず、1860年代後半まで待たねばならない。きっかけはヨハン・バルトルト・ヨンキント(1819-1891)の作品の流行であった。このオランダ人画家の描く海景画が画商やコレクターたちの投機の対象となると、ブーダンは半ばその「代役」としての役目を果たすように、「海景画」の注文制作に応えた。ここに、「海景画家ブーダン」が誕生する。注文作品のヴァリエーションを増やすため、ブーダンは、アントワープ、ボルドー、ロッテルダムなど様々な場所へと向かい、なかでもトルーヴィル、ディエップ、フェカン、カマレなど中規模の港を好んだという。

広報用画像1

ウジェーヌ・ブーダン 《ドーヴィル》

1888年 油彩/カンヴァス 50×75.3 cm
ランス美術館 (inv. 907.19.32)
C. LE GOFF©

ドーヴィルはオンフルールから約20キロ離れた海岸沿いの町であり、ブーダンは1884年に家を購入すると、終の棲家とした。鉄道開通を機に、貧しい漁村から高級な海水浴場へと変貌したドーヴィルの海岸を描いた本作では、パリからの観光客はすっかり消え去り、静かな砂浜が広がっている。伸びやかな筆致でとらえた雲が大空のなかをゆったりと進行し、海面の飛沫が軽やかに踊る。画面全体が爽やかな空気感で満たされた、ブーダン円熟期の1点。



広報用画像2

ウジェーヌ・ブーダン 《ベルク、出航》

1890年 油彩/カンヴァス 79×110.2 cm
ランス美術館 (inv. 907.19.34)
C. DEVLEESCHAUWER©

フランス北部の海岸都市ベルクは、中世より漁業と交易で栄えてきた町である。英仏海峡に吹く風を受けて帆を広げる船団が、白い飛沫をあげる波の間を颯爽と進む。本作は、1890年の国民美術協会のサロンに出品されたうちの1点。画家はこれまでに海上の船という主題を繰り返し描いてきたが、本作のように野心的なサイズで描いたことはなかった。



II 空 Ciel

1859年の初めにブーダンが故郷オンフルールで出会った詩人シャルル・ボードレールは、ブーダンが無数に残した空の習作に注目した最初の人物である。同年のサロンの際、ボードレールは、「この習作は、波や雲の、最も不安定で最もとらえがたい力や光を、極めて迅速かつ正確に描き留めている」と評し、同様にカミーユ・コロヤギュスターヴ・クールベら同時代の画家たちも、ブーダンを「空の王者」と称賛した。本セクションで紹介する、油彩やパステルによる小型の習作からは、雲の動きや絶妙な光の変化をよく観察し、変わりやすい北部の空模様の一瞬の姿をとらえようとするブーダンの鋭敏な観察眼がうかがえる。またブーダンは17世紀オランダ風景画に見られる構図を継承し、画面の4分の3が空を占めるという構図で、サロンに出品するための大型作品を完成させた。



広報用画像3

ウジェーヌ・ブーダン 《空の習作》

1880年頃 油彩/板 27×21.5 cm
個人蔵、ノルマンディー

極めて小さな画面に、オレンジ、黄、白、灰色と、鮮やかな色彩が踊っている。ブーダンは、本作のような油彩による小型の習作を積み重ねることで、刻一刻と変化する空の表情をとらえようとした。ノルマンディーの移ろいやすい空模様は、雲の動きや光の変化に対するブーダンの鋭敏な観察眼を育てた。

広報用画像5

ウジェーヌ・ブーダン 《干潮》

1884年 油彩/カンヴァス 117×161 cm
サンロー美術館
© Musée d'art et d'histoire de Saint-Lô,
Pierre-Yves Le Meur

17世紀オランダ風景画に学んだブーダンが描く風景は、決まって画面の大半を空が占め、本作でも水平線上の太陽が広大な空をオレンジ色に染め上げている。潮が引いた後の海岸が太陽の光を反射して鏡のように輝き、小さく描き込まれた人物や船は、このドラマチックな光景の雄大さを強調する。1884年のサロンに出品された本作は、国家買い上げとなった。

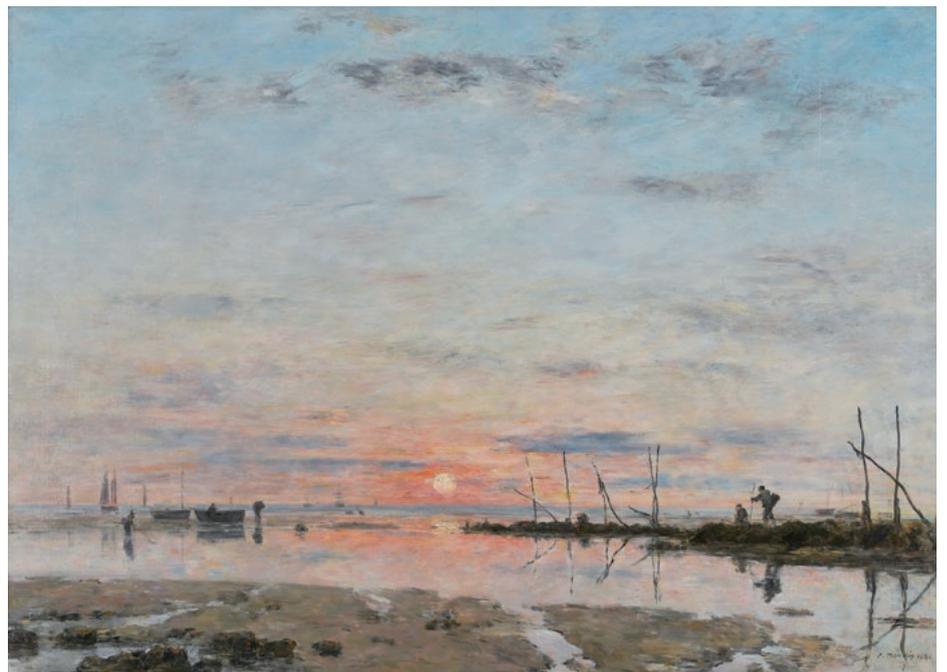


広報用画像4

ウジェーヌ・ブーダン 《ル・クロワジック》

1897年 油彩/カンヴァス 50.5×74.5 cm
アンドレ・マルロー近代美術館、ル・アーヴル
Le Havre, Musée d'art moderne André Malraux
© MuMa Le Havre / Florian Kleinfenn

ブルターニュ半島の南方に位置する漁港ル・クロワジック。入り組む海岸線を形づくる岩礁の黒々とした色合いと、緑がかった海の青とが鮮やかな対比をなしている。上空の青空を覆いつくすように白い雲が風を受けて巻き上がる様子が、自由闊達な筆致で表現されている。



III 風景 Paysages

19世紀を通じて、伝統的に絵画ジャンルの上位に属していた宗教画や歴史画がその権威を次第に失墜させていった一方、自然観察に基づいた風景画は、コローやバルビゾン派の画家たちの活躍により、時代の思潮とも合致することで、いわば当時の絵画界の主流へと躍り出る。ル・アーヴルで画材店を経営していたブーダン、この地を訪れるナルシス・ディアズ・ド・ラ・ペーニャやシャルル＝フランソワ・ドービニーらと出会い、彼らから風景画を学んでいった。農民や荷車が行き交う田舎の道を構図の要として用い、あるいは、蛇行する川や小さな港といった水辺の景色を対岸の建物や橋とともに描く構図は、そうしたバルビゾン派からの学びの成果である。

広報用画像6

ウジェーヌ・ブーダン

《トルーヴィル街道、ピュタン近郊》

1860–63年 油彩/カンヴァス 57×83 cm
ウジェーヌ・ブーダン美術館、オンフルール
Honfleur, musée Eugène-Boudin // Illustria

ノルマンディーの海辺の町トルーヴィルの田舎道を行く農民と馬が引く荷車を描いた本作は、ブーダン初期の特徴をよく示す作例である。手前から奥へと収束する道によって奥行き空間を設定する構図や、画面中央に配した主要な人物と動物を正面からとらえる描き方は、バルビゾン派のとりわけトロワイヨンからの影響である。また、雲や樹々の形態を丁寧にとらえ、落ち着いた色彩で塗り込めるような描き方も、初期の特徴である。



広報用画像7

ウジェーヌ・ブーダン

《トゥークの古い港》

1890年 油彩/板 52×68 cm
ブーローニュ＝シュル＝メール市立美術館
© coll. Musée Boulogne-sur-Mer Ville de Boulogne-sur-Mer



IV 建築 Architectures

ブーダンは、雲といういわば「移ろう建築物」や船を得意とする画家として名を馳せたが、石造あるいは木造の建造物も生涯にわたり描き続けている。妻との結婚を機に滞在を重ねたブルターニュでは教会の門や十字架を、また、旅先のオランダやヴェネツィアでは、その土地に特徴的な建築を描いた。しかし画家自身、「『風景の乱れ』に甘やかされた老人にとって、ヴェネツィアを描くことは難しい」と告白する。建築という堅固な対象を描くことへの困難を自覚しつつも、ブーダンは晩年まで移ろう自然のなかに佇む建築物を描き続けた。

広報用画像8

ウジェーヌ・ブーダン

《廃墟のラッセイ城》

1893年 油彩/カンヴァス 50.5×74 cm

ブーローニュ=シュル=メール市立美術館

© coll. Musée Boulogne-sur-Mer Ville de Boulogne-sur-Mer

開けた草地に佇むのは、廃墟と化した中世の城跡である。ブーダンの眼を介すと、風化した石造りの建物から醸し出される時間の経過がロマンチックに描き出されることは決してなく、牛や羊たちが草を食み、鳥が空を飛ぶ、長閑な田舎の風景の一部となる。



広報用画像9

ウジェーヌ・ブーダン

《ヴェネツィア、税関とサンタ・マリア・デッラ・サルレーテ聖堂》

1895年頃 油彩/板 19.7×39.6 cm

ランス美術館 (inv. 907.19.39)

C. DEVLEESCHAUWER©



広報用画像10

ウジェーヌ・ブーダン

《ヴェネツィア、サン・ジョルジョ・マッジョーレ》

1895年頃 油彩/板 20.5×39.6 cm

ランス美術館 (inv. 907.19.38)

C. DEVLEESCHAUWER©

晩年になってようやくヴェネツィアを訪れたブーダンは、地中海の明るい陽光と水上に浮かぶ都市という魅惑的な景観に魅せられて、滞在中に数多くの油彩と素描を残した。本展に出品されるヴェネツィアを主題とする3点は、全8点から成る連作の一部であり、画家が亡くなるまで手放さなかった作品である。横長の画面いっぱいに広がる建物群はまさにヴェネツィアらしい眺めをつくり、初期の遠近法に基づく深い奥行き空間とは対照的に、小型の作品ながらパノラマ的な空間の広がりを感じさせる。



V 動物 Animaux

温暖で湿潤な気候のノルマンディー地方は、牛の飼育に適した豊かな牧草地が広がる地域である。近代化や工業化の波を経て人々の関心がますます田舎の生活へと向かう時代、1880年代になると、かつてブーダンが教えを受けたトロワイヨンによる動物画の評価は急上昇し、ブーダンも、画商デュラン=リュエルの要請を受けて、「トロワイヨン風の作品を、自分のやり方で」描き始めた。約10年にわたって、ブーダンは牧草地の牛の群れを数多く制作したが、その表現はかつての師とは異なって、次第に動物たちは単なる色の斑点に還元されてゆき、抽象表現に近い境地に達している。



広報用画像11

ウジェーヌ・ブーダン
《水飲み場の牛の群れ》
1880年 油彩/カンヴァス 79.3 × 109.6 cm
ランス美術館 (inv. 907.19.33)
© C. DEVLEESCHAUWER

VI 人物 Figures

ブーダンはその初期に、おそらくジャン=フランソワ・ミレーの影響を受けて、主に家族をモデルとして肖像画を制作していた。しかし、その表現はブルジョワの趣味に合致せず、またダゲレオタイプの発明を機とする肖像写真の流行もあいまって、ブーダンは早々に肖像画というジャンルから遠のいた。むしろ画家が関心を持ったのは「自然の中の人物像」であり、その源流は、奨学生時代に制作したアントワヌ・ヴァトー作《シテール島の巡礼》の模写に求められるだろう。その後もブーダンは、夏の海水浴客や浜辺の漁師、川辺で洗濯をする女性などを繰り返し描いている。



広報用画像12

ウジェーヌ・ブーダン
《ドゥアルヌネ湾(フィステール)のサンタンヌ=ラ=バリユのバルドン祭》
1858年 油彩/カンヴァス 87 × 146.5 cm
アンドレ・マルロー近代美術館、ル・アーヴル
Le Havre, Musée d'art moderne André Malraux
© MuMa Le Havre / Florian Kleinfenn

絵になる風景を求めていたブーダンは、妻の故郷であるブルターニュ地方へと赴き、生涯にわたりこの地を繰り返し題材とした。同地の伝統的な宗教的行事バルドンを描いた本作は、35歳で初めて挑戦したサロンに出品された、ブーダン初期の重要作である。遠方に教会の鐘楼や小高い丘を



広報用画像13

ウジェーヌ・ブーダン
《傘をさす女性、バルクの海岸》
1873年頃 油彩/板 12.5 × 17.5 cm
ウジェーヌ・ブーダン美術館、オンフルール
Honfleur, musée Eugène-Boudin / Henri Brauner

望む開けた平原では、伝統衣装姿の人々が集い、食事を用意したり話し込んだりと思いつきに過ごしている。衣装の細部描写や、さまざまなポーズをとる人物表現からは、この地の独特な風俗に対する画家の強い関心と、初期特有のアカデミックな表現が観察できる。

素描 Dessins

ブーダンにとって素描は、対象の表面だけでなく本質を理解するための手段であり、また制作の着想源を養う活力でもあった。描き溜めた素描を参照しながら、その場所が持つ空気感や人物のポーズ、あるいは、ある瞬間の雰囲気や再確認し、準備下絵に色彩、色調、形態に関する客観的な情報を加えていったのである。印象派世代の画家たちは、時に緻密で時に即興的なブーダンの素描を重視し、自分たちの先駆者として認識した。わずか数本の素早い線で本質が示される、その喚起力に魅了されたのである。事実ブーダンは、こうした言葉を残している―「素描をしなさい、素描を。絵画で重要なのはそれだけだ」。



広報用画像14

ウジェーヌ・ブーダン

《トルーヴィルの海岸の貴婦人(トルーヴィルの海岸のメッテルニヒ夫人)》

1863年 水彩・鉛筆／紙 17×24.3 cm
個人蔵、ノルマンディー

版画 Estampes

19世紀後半の版画芸術が開花した時期にあつて、ブーダンは自ら版画を制作することはほとんどなく、2点のリトグラフと1点のエッチングが知られているのみである。オリジナル版画を制作しなかったにもかかわらず、ブーダンは、版画制作のためのモデルとなる素描はしばしば提供していた。ここでは、それらを基に制作されたリトグラフやエッチングを紹介する。

会期中のイベント ※各イベントの詳細は美術館ホームページで随時公開します

学芸員のギャラリートーク【要申込】

本展担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について展示室で解説します(専用イヤホンを使用)

開催日時および申込期間:

4月24日(金) ①14:00-14:40、②18:00-18:40 申込期間:3月24日(火)-3月26日(木)

5月15日(金) ①14:00-14:40、②18:00-18:40 申込期間:4月15日(水)-4月17日(金)

定員:各回20名(抽選) 参加費:2,000円(税込)

参加方法: web申込/美術館ホームページからご応募ください

・高校生以下無料 ・ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

ギャラリー★で★トーク・アート【要申込】

6月8日(月) 14:00-16:00

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話しをしてみませんか? 作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話しながら楽しむ参加型の作品鑑賞会です

定員:30名(先着順) 参加費:2,000円(税込)

参加方法: web申込/4月10日(金) 10:00より美術館ホームページにて受付開始

・高校生以下無料 ・ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

展覧会名: 開館50周年記念
ウジェーヌ・ブーダン展—瞬間の美学、光の探求
 The 50th Year of the Sompo Museum of Art
Eugène Boudin, maître de l'instantanéité

会期: 2026年4月11日(土) — 6月21日(日)

会場: SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

休館日: 月曜日(ただし5月4日は開館)、5月7日

開館時間: 10:00-18:00(金曜日は20:00まで) ※最終入場は閉館30分前まで

主催: SOMPO美術館、朝日新聞社、テレビ朝日

特別協賛: SOMPOホールディングス

特別協力: 損保ジャパン

協力: 日本航空

後援: 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ、新宿区

監修: ローラン・マヌーヴル

企画協力: ブレーントラスト

観覧料(税込): 一般(26歳以上)/事前購入券1,800円、当日券2,000円

25歳以下/事前購入券1,100円、当日券1,200円

高校生以下無料

身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳(ミライIDも可)をご提示のご本人とその介護者1名は無料、被爆者健康手帳をご提示の方はご本人のみ無料

・25歳以下の方は生年月日が確認できるものをご提示ください

・事前購入券は3月11日(水)10:00から販売開始、公式電子チケット「アソビュー!」、イープラス、

ローソンチケット(Lコード:32269)、チケットぴあ(Pコード:687-408)などでお買い求めいただけます

・事前購入券は手数料がかかる場合があります

・購入方法の詳細は美術館ホームページをご確認ください

ホームページ: <https://www.sompo-museum.org/>

お問合せ: 050-5541-8600(ハローダイヤル)

アクセス: 新宿駅西口より徒歩5分



プレスお問合せ

「ウジェーヌ・ブーダン展」広報事務局(ウインダム内)

e-mail sompo-m-pr@windam.co.jp Tel. 03-6661-9447 Fax. 03-3664-3833

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11 鴨下ビル2階

収蔵品
コーナーフィンセント・ファン・ゴッホ
《ひまわり》、ほかSOMPO美術館
Sompo Museum of Art